
我々の宝と北の果てに住まう魔王

keith_mild

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我々の宝と北の果てに住まう魔王

【Nコード】

N8738N

【作者名】

keith_mild

【あらすじ】

「我々の宝」と呼ばれる王女とそれに目をつけた魔王。幸せだったはずの国を襲った災厄に国は嘆き悲しんだのだが……。童話風の作品。あっさりとした味付けです。

とある国のお話。

その国の王女は大変美しく、絹糸のような金髪は星を散りばめられたように輝き、緑の瞳はエメラルドよりも強い光を湛え、肌はどんな手触りの布よりも細やかで白かった。それだけでも歴史の書物に記されてもおかしくなかったが、さらに王女は慈悲深く聡明で、知識や経験を積極的に得ようとする、前向きな人柄であった。高貴なる身分であるが故に、民との触れ合いはなかったが、王女は積極的に国の様子や国民の暮らしについて勉強しており、そのひたむきさは見る者の襟を正し、聞いた者の背筋を伸ばした。

そんな王女であったから、父である王様は勿論、城勤めの者たちや一度も王女を見たことのない平民たちですら王女のことを大切に思っていた。他国からこの国に訪れた者に王女について語る時、いくら言葉を重ねてもその思いを正確に伝える事ができないので、逆にただ一言で語るほどであった。単純であるが故に誰でも分かる一言。「我々の宝」……それが王国に住む者たちが王女について語るただ一つの言葉であった。

そんな「我々の宝」も王女という立場である以上、間もなく結婚をしなければならぬ年齢が近付いてきた。世の常として、やはり王女は他国に嫁ぐ事が多い。それは「我々の宝」たるこの国の王女も例外ではなく、着々とその時は近付いていた。無論、他国から既に数多くの話は届いており、王様はせめて王女が幸せになれるようにと、日がな頭から湯気を出すほどに熟考しては王女の婚姻相手を探していた。

そのまま無事に時が過ぎれば、王女はそう時が経たぬうちに他国へと嫁ぎ、素敵な王子様と共に暮らし、童話のような終わりを迎えたのはずだったが、残念ながらそうはならなかった。ある日の夜、

嵐のような風雨に紛れ、王城に悪魔がやってきたのである。醜悪な外見と不快な金切り声で悪魔は告げた。魔王が王女を所望している。と。渡さねばこの国を滅ぼしてしまうぞ、と。悪魔が告げた直後、ガガアンと雷が王城の近くに落ちた。だが、誰も彼もが悪魔の言葉に衝撃を受けており、外の様子は一切気にならなかった。呆然とする皆の様子をせせら笑いながら、悪魔は去っていった。去り際に、一年後迎えが来る、それまで王女の美しさを磨いておけ、という言葉を残して。

それから、王城は荒れに荒れた。魔王の申し出は到底受け入れられるものではなく、王様を始め、多くの者が魔王に対して憤っていた。だが、それ以上に皆、嘆いていた。魔王は遙か北の果て、草も生えぬような極寒の地に居城を構え、徒に他国を襲ってはその欲を満たすような、恐ろしい国の王であった。しかも、魔王は国を一瞬で焦土に変えてしまう強大な魔法を有しており、誰も倒す事はできないと伝えられているほどの強さであった。長年、平和であったこの国では到底太刀打ちできるような相手ではなく、他国も魔王の名を聞いただけで怯えてしまい、とても手助けなど頼めそうになかった。憤慨していたはずの王城の者たちも、時が経つにつれ、次第に悲観に暮れるようになってしまった。王様は心労で病に臥せ、大臣たちは仕事に手が付かなくなり、騎士たちは自分たちの無力に絶望し、酒に溺れるようになってしまった。民などは失意の余り、世捨て人同然となって街はあつという間に活気を失ってしまった。戦わずして、その国は腐り始めてしまったのである。

だが、当の王女だけは普段と変わらなかった。いや、むしろ王女は普段よりもずっと動いていたと言つて良い。嘆いている王様の代わりに王族の責務を果たし、大臣の代わりに国家運営の舵取りを行い、騎士たちの代わりに軍の管理をした。だが、王様も大臣も騎士も、それには気付いていなかった。彼らはただ悲しんでいただけであつた。その間、ずっと王女は働いていた。そして、学んでいたの

である。

それからあつという間に一年が経った。あの夜と同じく、嵐のような風雨が城を襲う中、悪魔がやってきた。今度はおどろおどろしい輿と共にやってきている。人々は震え、悲しんだ。或いは何もせずに呆然と立ちすくんでいた。そんな中、王女だけはいつも変わらず、しつかりとした足取りで輿へと入り込む。悪魔は少しばかり驚いたものの、目的を果たしたことに満足し、去っていった。

それから、その国は以前とは想像もつかないほど暗い国となった。「我々の宝」たる王女がいなくなり、昼は太陽が燦々としていても薄暗く、夜は月が煌々としているのに何も見えない日々が続いた。国中が悲しみに暮れ、涙で大地は常にぬかるんでしまうほどであった。王様はいよいよ生氣がなくなり、朝から晩まで寝込んでしまっていた。大臣は隠居してしまい、騎士もまた剣を捨ててしまっていた。民は家から一步も出ず、普段は祈りを捧げていた神をなじっていた。このまま遠からず、国は滅びてしまつたろう。人であれば既に手足が腐ってしまったような有様だった。だが、誰も想像もしないような事が待っていたのである。そう、王女が戻ってきたのだ。

王女が北の果ての魔王の下へ向かってからひと月も経たぬ頃。ひよっこり王女が戻ってきた。本当にあまりにもひよっこりとしたものであったから、始めは誰も王女とは思わなかつたほどであった。或いは、魔王が遣わせた偽者ではないかと疑うほどであった。だが、王女から魔王が斃れ、北の果てにあつた魔王の国が滅びたことを聞き、同時に国へ流れてきた噂話でそれが事実である事を知り、国中が歡喜に沸いた。病床の王様はたちまち元気になり、大臣は城へ戻り、騎士は剣を掲げて王女の名を叫んだ。国民はまだ泣いていたが、それは嬉し涙であり、流れた涙は大地に恵みをもたらし、色とりどりの花が咲いた。太陽も月も星も、優しく国を照らすほどであった。

こうして、魔王の脅威はなくなり、王女が国へと戻り皆が幸せになったのだが、一つ謎が残っていた。誰も彼もが喜びすぎてすっかり忘れていた事。誰が魔王を倒したのであるうかという事。それは、きつと王女を注意深く見ていれば気付いたかもしれない。王女にふさわしい豪華なドレスはとどころ解れ、星を散りばめたような金髪はすっかりくすんでいる上に以前よりも短くなっている。白磁のような肌は小さな傷があり、特に手は以前よりもゴツゴツとしていた。まるで剣を手に、激闘を潜り抜けたかのような。ただ、懸命な人間がその可能性を指摘したとしても、王国の皆は誰も信じないであろう。一年の時を費やして国を盛り立て、その間を縫うように魔王について調べ上げ、贄としてではなく勇者として魔王の元へと向かったなど。真実を知れば、王様などは卒倒してしまっただろう。王女がその事を話さなかったのもそういった理由があったからかもしれない。

そうして、王女は「我々の宝」としてあり続け、さらにその後は女王として国を治めることとなった。「我々の宝」を掲げた王国は平和を享受し、世界で最も幸せな国として世界の歴史に名を刻む事となる。無論、どの歴史の書物を紐解いても、魔王を打倒した王女である事など記されるはずもなかったのだ。

【了】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8738n/>

我々の宝と北の果てに住まう魔王

2010年10月11日11時54分発行